スマホ・PCで動画公開
9日全面公開

金石市鵜住居町の東日本大震災の犠牲者の行動を再現したサイトのデモ動画は、パソコンやスマートフォンで見られます。スマホのサイトは2次元バーコード（QRコード）からアクセスが可能です。パソコンは岩手日報社ホームページの震災特集ページ（http://www.iwate-np.co.jp/311shinsai/shinsai_top.html）からアクセスできます。9日には角度や場所を自分で操作できる特設サイトを全面公開します。

忘れない

命を守る5年の誓い
- とにかく逃げる 逃げたら戻らない
- 避難場所を過信せず、少しでも高い場所へ
- 助かるための避難訓練を
- 「ここまで津波は来ない」は通用しない
- 災害弱者を救うルールづくりを

犠牲者の行動記録

②釜石市、大船渡市

震災5年

岩手日報社と首都大学東京の渡辺英徳准教授の研究室が再現した震災犠牲者の行動から一人一人が想定にとらわれず、高台に避難する意識を持つことの必要性が浮かび上がった。釜石市鵜住居地区では、訓練で利用されていた低地の施設に避難した住民が多く犠牲となったことが分かり、大船渡市中心部では過去の災害の記憶が避難を妨げた傾向が見られた。

鵜住居防災センターへ避難　高台に向かわず

地震発生時

津波襲来前

津波襲来時

【調査方法】震災犠牲者の生きた証しを残す企画「忘れない」の取材に協力いただいた遺族に本社記者が面談と郵送で実施。昨年11月6日から今年1月30日までに遺族1549人から回答を得て、犠牲者2135人を分析した。地震発生時と津波襲来時にいた場所が判明した1326人は避難行動を再現。遺族の了解を得た687人（男性296人、女性391人）は実名で掲載した。地図は国土地理院の航空写真を利用している。県内の死者・行方不明者は5796人。「忘れない」では3428人を掲載している。

「訓練通り」悲劇招く

教訓　動きを読み解く

大きく揺れた後、四方から十力所に向かって人が集まってくる。その金石市鵜住居町の鵜住居防災センターには地域住民が相次いで避難したが、津波で200人ともいわれる犠牲者が出た。

藤原チヨさん(70)は自宅から近所の人たちと声を掛け合って避難。山側からわさわざ危険な海側のセンターに向かう動きも見えてくる。

遺族アンケートでセンターに避難したことが分かっている犠牲者48人のうち、地震後すぐに避難したと答えたのは47・9%で、同市全域（13・6%）の3・5倍。避難意識はあったものの、なぜ命を守れなかったのか。2010年2月に開所したセンター。「防災」の冠称がつき、地元住民の避難訓練の場所として利用されていた。栗沢昌彦さん(64)(53)は子どもを心配して迎えに来た保護者に対応するため学校に残り被災した。

鵜住居地区では地域の協力もあって、より高い場所を目指した児童生徒の避難行動が脚光を浴びた。日ごろから一人一人が逃げる場所を確認し、一度避難したとしても、危険を感じたらより高台に向かう「2次避難」も考える必要がある。

（亡くなった人の年齢は当時）

多くの地域住民が避難し犠牲となった釜石市の鵜住居地区防災センター＝2011年3月22日

道沿いなどでは、家族の帰りを待つなどして自宅にとどまる人が目立つ。鵜住居小事務職員の木村タカ子さん(53)は子どもを心配して迎えに来た保護者に「ここまで来ない」と推測する。

ただ、同センターは津波注意報や警報が発表されたときに向かう「1次」津波」避難場所ではなく、地域の本来の避難場所は高台の寺院だった。センターを訓練に利用していたこともあり、津波避難の場所として混同していた住民も多かったとみられる。

海から距離のある国道沿いなどでは、家族の帰りを待つなどして自宅にとどまる人が目立つ。鵜住居小事務職員の木村タカ子さん(53)は子どもを心配して迎えに来た保護者に対応するため学校に残り被災した。

鵜住居地区では地域の協力もあって、より高い場所を目指した児童生徒の避難行動が脚光を浴びた。日ごろから一人一人が逃げる場所を確認し、一度避難したとしても、危険を感じたらより高台に向かう「2次避難」も考える必要がある。

（亡くなった人の年齢は当時）

鵜住居地区防災センターに避難した両親をてくり、高台の本当の避難場所に逃げる訓練の大切さを思う佐々木稔さん＝矢巾町広宮沢

記憶　遺族の思い

佐々木稔さん（矢巾）両親犠牲
本来の逃げ場なら…

震災時に多くの住民が避難し、犠牲になった釜石市の鵜住居地区防災センター。矢巾町広宮沢の特別支援学校教諭佐々木稔さん(34)は父亮次さん＝当時(63)、母敏子さん＝同(62)＝を失った。

センターは1次避難場所ではなく、中長期の避難生活のための拠点避難所。地元町内会では高齢者の負担も踏まえ、本来避難すべき高台の寺院ではなく、低地のセンターで訓練することもあった。

耳の不自由な佐々木さんの両親は2日前の地震で近所の住民に支えられて自宅から200メートルほどのセンターに避難しており、「先祖が眠る寺院が避難場所だと思うが、普段の訓練通りに避難したのだろう」と推測。「新しい地域の防災拠点への安心感があったともみる。

あれから何度も現地に行った。「大変なら教員のこのうち1回でもいい。地域、家族で本当の避難行動を確認してほしい」。両親の死、地域の多くの犠牲を経て高台に逃げる訓練の大切さを感じ、静かに仏壇を見つめる。

動けない―災害弱者直撃

焦点　釜石市街地

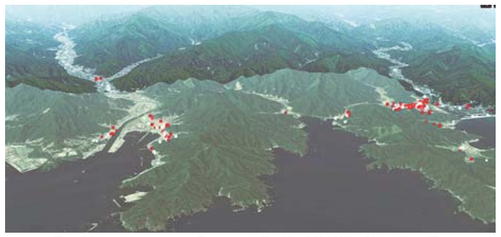
釜石市中心部の東部地区は、再現したイメージから地震発生時と津波襲来時に同じ場所にとどまったことが分かる。自宅から避難できなかった高齢者や障害者が少なくなく、「要支援者」の避難策の重要性を浮き彫りにしている。

同市浜町に1人で暮らしていた長谷川はなさん(100)は震災当時、骨折していたため、自分で避難することができず、自宅で被災した。同じように高齢独居で、避難が間に合わずに犠牲になった人も多い。体が不自由なため、揺れが収まってから避難しようと準備していたが、津波にのまれた高齢夫婦もいた。

内陸側から海側に向かった動きもある。草山もゝさん(83)は買い物中に地震が発生。海に近い同市新浜町の自宅にいる夫勝郎さん(90)を心配し、知人の車で戻り、被災した。もゝさんの帰りを待っていたとみられる勝郎さんも犠牲になった。

釜石市　市の東側に位置し、リアス海岸の四つ「唐丹」とつに、釜石、両石、大槌＝の湾の奥に住宅が集中する。東日本大震災では140人＝死者888人、行方不明者152人＝が犠牲になり、市内21地区が被災。市役所がある市中心部の東部、市北部の鵜住居の地区が市内で最も甚大な被害を受け、多くの漁村集落は震災直後に孤立した。最大波高63メートルで世界最深の防波堤として知られる釜石港の湾口防波堤は、震災で南端の半分、北端の9割が破壊されたが、津波到達を遅らせるなど減災に一定の効果があったとされている。

釜石市	
人口	3万6686人（11年3月比2713人減）
死者	888人
不明者	152人
関連死	104人


釜石市市街地（左）と同市鵜住居町（右）。リアス海岸の湾の奥に住宅地が広がっていた

地震発生時

津波襲来時

動かない―経験が過信に

焦点　大船渡市街地

大船渡市大船渡町の市街地は、JR大船渡線の山側と海側で明暗が分かれた。山側では1960年のチリ地震津波の記憶から「津波はここまで来ない」と動かない人が続出。経験が避難の足かせとなった。

線路より海側に住んでいた八木猛さん(86)はチリ地震と33年の昭和三陸の2度の津波を経験。鉄筋コンクリート造り3階建ての住宅を造り、3階に上れば津波を防ぐことができると語っており、逃げなかったようだ。

「ここまでは来ない」「ここなら大丈夫」という認識には、チリ地震津波の記憶が大きい。国内最多の53人が犠牲となった同市は、避難訓練を重ね、津波への意識は高かった地域といえる。

だが、市民も行政も判断基準がチリ地震津波だったため、それ以上の想定が難しかった。高齢の犠牲者が圧倒的に多いことも50年以上前の記憶が逃げなかった理由の一つとみられる。

物語る。自然の脅威を経験だけで測るのは危険だ。

大船渡市　海辺と迫り、平地は少ない。本州一のサンマ水揚げなど水産関連業が盛ん。2001年に旧三陸町と合併した。震災では中心市街地の大船渡町のほか、末崎町、赤崎町、吉浜町、旧三陸町3地区に津波が押し寄せた。死者340人、行方不明79人。60年のチリ地震津波では国内最大被災地となり、大船渡湾には湾口防波堤が設置されたが、今回の津波で倒壊した。震災前には市民の津波到達の基準となっていたJR大船渡線は鉄路で宿泊せず、専用道を走るバスの交通システムが運行され、最多の53人が犠牲となった同市は、避難訓練を重ね、津波への意識は高かった地域といえる。

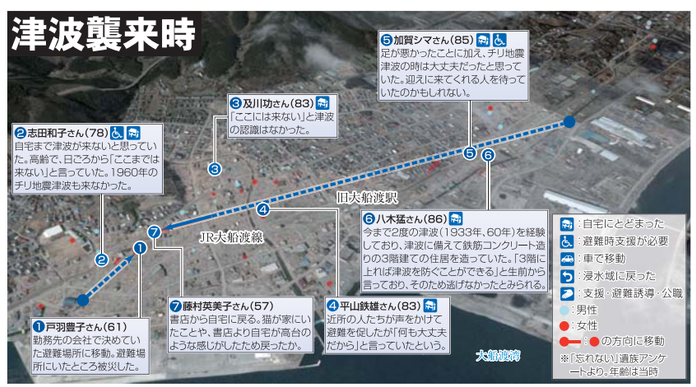
だが、市民も行政も判断基準がチリ地震津波だったため、それ以上の想定が難しかった。高齢の犠牲者が圧倒的に多いことも50年以上前の記憶が逃げなかった理由の一つとみられる。

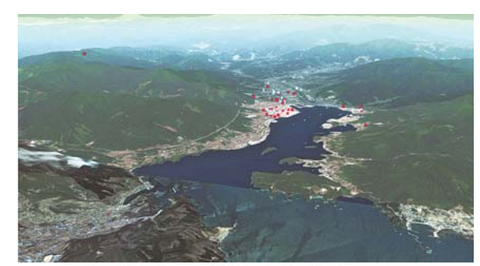
物語る。自然の脅威を経験だけで測るのは危険だ。

大船渡市	
人口	3万7929人（11年3月比2650人減）
死者	340人
不明者	79人
関連死	79人

地震発生時

津波襲来時




大船渡市は津波のパワーが集まる湾奥の中心市街地で多くの人が犠牲になった